

お米のはなし

お米や稲に関するちょっとした情報・豆知識を専門家が綴る「お米のはなし」の第32弾をお届けします。

(シリーズ担当：R.I.)

第32話 昔と今の米作り (5. 稲刈り・脱穀)

⑤ 稲刈り・脱穀



図 32-1 江戸時代（元禄）の稲刈りとはざかけ、脱穀の様子

鎌でイネを刈り、「はざ」に掛けて干します。これを「はざがけ」といいます。乾いたイネから絵にあるような「こきばし」という道具を使って、脱穀します。はざがけは、地方によって様々な方式があります。



図 32-2

昭和 30～40 年代の稲刈り風景

昔と変わらず、人の手でイネを刈ります。
(昭和 41 年 山形県川西町)



図 32-3

現代のコンバインを使っでの収穫風景

コンバインで稲刈りから脱穀までします。
(平成 2 年 岡山県岡山市)

(出典) 図 32-1～3 は、いずれも http://www.maff.go.jp/j/agri_school/a_kome/index.html から引用

関連する用語の解説：

【コンバイン Combine】

- 稲の収穫作業には、一般に「自脱コンバイン」といわれる機械が使われます。
- コンバインとは、「刈取機と脱穀機が一つになった機械」という意味です。
- バインダによる収穫作業では、収穫→天日乾燥→脱穀という流れがありますが、コンバインでは収穫と脱穀作業が同時に行われるため、その後に米を乾燥させます。
- 乾燥には、一般的に穀類乾燥機を用いるので、コンバインと穀類乾燥機はセットで導入する必要があります。
- 自脱コンバインは、稲と麦の両方を収穫することができます。
- ただし、作目を切り替える場合には、こぎ胴の回転数などを作目に合わせて変えるなどの調整が必要です。
- この他に、種子収穫用の自脱コンバインとして「種子用コンバイン」があり、掃除の際に機械の中に種子が残留しにくい構造となっています。
- コンバインには、「自脱コンバイン」の外に「普通コンバイン」と「汎用コンバイン」があります。
- 自脱コンバインでは穂先部分のみ脱穀部に入るのに対し、「普通コンバイン」と「汎用コンバイン」では、藁(わら)も穀粒も全部脱穀部に入る点が主な相違点です。

- 普通コンバインでは、こぎ胴が作物の流れに対して直角に置かれているのに対し、汎用コンバインでは、こぎ胴が作物の流れに対して平行に設置されている点が異なります。
- 最近、食味センサ、収量センサ等が付いたコンバインが市販化されています。
- 圃場ごとの食味・収量データやコンバインの稼働情報を利用して、栽培や経営の改善を図ることが期待されます。

(出典) みんなの農業広場 <https://www.jeinou.com/benri/rice/2008/05/010930.html> から引用

無人田植え機だけではなくありません。無人の自動運転コンバインが研究開発されています(図 32-4)。また、無人トラクターもあります。

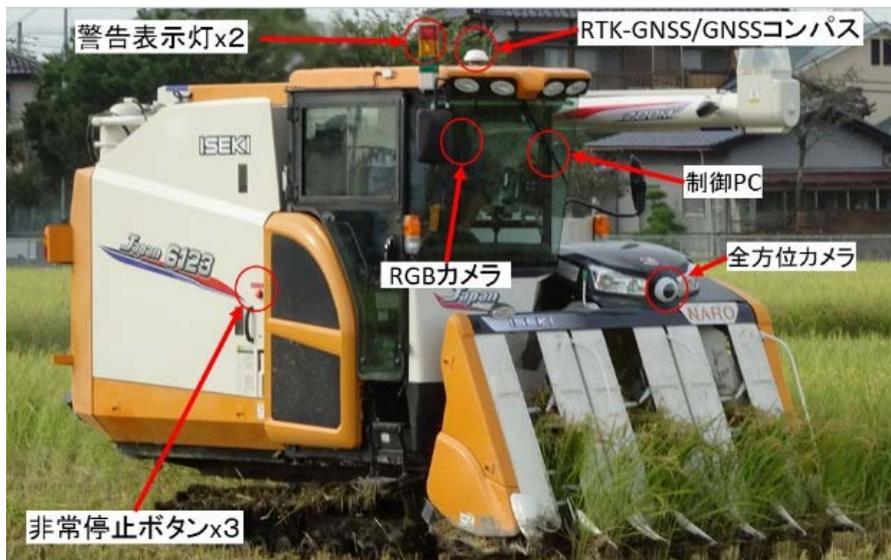


図 32-4 無人自脱型コンバイン開発機

(出典) 革新工学センターニュース No. 6 平成 31 年 2 月 8 日 農研機構 から引用